

教育の理念としくみを熟知し 教室外での教育を担うアドバイザー

国際基督教大学

国際基督教大学では、リベラルアーツの理念を具現化すべく、アカデミックアドバイザーの職員が学生の履修計画の相談に乗っている。教育理念と結び付いた学びのシステムの下で学生をナビゲートする機能は、他大学でも検討の余地がありそうだが、この機能をなぜ、いかにして職員が担っているのだろうか。

各メジャーの情報を与え 適切な選択を支援

国際基督教大学 (ICU) のアカデミックプランニング・センターは、学生が気軽に立ち寄れるよう食堂の2階に置かれている。上級准教授の小瀬博之センター長は、主に学部長ら教員との調整を担当。学生の個別相談をはじめ、センターのサービスを企画・実施するのは、教務部所属のアカデミックアドバイザー・森川園子、大枝さやかの両氏だ。いずれも同大学の卒業生で、30代半ばの職員。

個別相談の対象は全学年にわたるが、特に1、2年生には同大学の特色であるメジャー制の下、2年次修了時に適切なメジャー選択ができるよう情報を提供し、アドバイスする。

両氏は、文理にまたがる31のメジャーそれぞれについて、カリキュラムの特色や教員の研究テーマ、メジャー選択のための要件、卒業後の進路などを熟知。「このメジャーに進むにはどんな履修計画を立てたらいいか」と相談に訪れる学生に対し、本人も自覚していない真の興味・関心を引き出すようなコミュニケーションを図

り、主体的な判断と選択を促す。

教員アドバイザーと共に 教育理念の根幹を支える

アカデミックプランニング・センターの職員によるアドバイジングは、2008年度のメジャー制導入と同時に始まった。独自の教育システムを機能させるために不可欠なものとして位置付けられている。

2007年度までは、教養学部の6学科の中から選んで受験、入学するシステムだった。これを、アーツ・サイエンス学科で一括して受け入れ、3年次からメジャーに分けるしくみに変更。各メジャーに定員は設けず、要件を満たせば希望どおり受け入れる。自由に幅広い分野を学んで視野と関心を広げ、専攻を絞り込むというリベラルアーツ、レイタースペシャライゼーション*の理念をより鮮明にする改革だった。

同大学では創立以来、アカデミックプランニングの考え方にに基づき、各学生に所属学科の教員を1人ずつ割り当てるアドバイザー制を敷いてきた。もともと学科の垣根を越えて幅広く自由に学べるシステムだったため、つまみ

食いな履修に陥らせず、主体的で計画的な学修を促すことが狙いだ。

メジャー制導入後は、文理の別を考慮したうえで無作為に教員を割り当てることになった。そのため、教員が自分の所属以外のメジャーについての確かなアドバイスができないという事態が予想された。教員1人が平均32人の学生を担当しており、個人の姿勢によってアドバイスの質に差が生じては、メジャー制の根幹が揺らぐと考えた。

そこで、教員アドバイザーとは別に、全メジャーに及ぶ幅広い知識を備え、全ての学生を対象とする職員のアドバイザーが誕生したのだ。教員アドバイザーには、履修登録時の承認のサイン、推薦状の作成等の権限があるが、個別相談については教員と職員のアドバイザーの役割に違いはない。

価値観を問い直し 視野を広げさせる対話力

森川氏はセンター開設の半年前、初代センター長と共に運営方針やサービス内容の検討、しくみづくりから関わり、開設2年目に大枝氏が加わった。

2人は年間、延べ約450件の個別相談への対応のほか、メジャー説明会やセミナーの企画・実施、ハンドブックの作成、新任教員のオリエンテーションなどを担う。現在、2年生以上17人が務めるピア・アドバイザーの選抜・育成、さらに、メジャー選択の動向をレポートにまとめ、センター長を通して教授会に提供するのも2人の役割だ。教員とのコミュニケーションを深めて教学に関する情報を集めようと、お茶会も企画する。

個別相談では「2年次修了までにA、Bいずれかの科目を履修し、GPAが2.0以上」など、メジャーごとに異なる選択のための要件を説明し、それを目標に据えた履修計画についてアドバイス。さらに、正課外も含めて推奨される活動、修得すべき知識を示し、就職相談グループや国際教育交流グループなど、学内リソースも紹介する。

アドバイザーに求められるのは定型的な知識や情報だけではない。その前段階のコミュニケーションでこそ、力量が問われる。

相談に訪れる学生のメジャー選択に対する気持ちの熟度はさまざまで、思い込みやイメージが先行しているケースも多いという。国際関係学に進みたいという学生に、「なぜか」「そこで何を研究したいのか」といった問いを重ね、「それなら教育学や政治学というメジャーも選択肢になるのでは?」という具合に視野を広げさせる。

また、一見、目標が明確でしっかりした履修計画を作ってくる学生でも、やりとりの中で「親が」「就職のことを考えると」という言葉が出てきたら、自分の本来の価値観をいま一度考えさせる。

ダブルメジャー、メジャーとマイナーという同大学独自の学びのシステムを選択することもあるが、省察を経たうえで決められるよう対話を重ねる。



履修計画について学生にアドバイスする森川氏(右奥)と大枝氏(左奥)

学生のあるべき姿勢を 明示し、引き出す育成役

センターのウェブサイトには、「アドバイザーとの実りある関係を構築するためには、学生にも責任が求められます」と前置きし、「学生の役割」を明記している。「自主性を持ち」「自分の価値観や目標、興味や能力について明確に伝える」「意志決定に伴う責任を受け入れる」といった姿勢を、実際の相談の場面でも引き出すよう努める。

「学生は、何かを選ぶということは他を捨てることだと考えがち。そうではなく、一つの軸を定めると、それと関連付けることによってむしろ世界が広がることに気付いてほしい」と森川氏。「自由な学びとその深化・統合」というリベラルアーツの本質の深い理解が、仕事の土台になっている。

大枝氏は、「自分のアイデンティティの一部になっているICUの理念を磨く仕事に、やりがいを感じる」と話す。2人は職員として大学の理念を共有し、教室外での教育を担っているわけだ。

両氏によると、アメリカではリベラルアーツ系に限らず、多くの大学にアカデミックアドバイザー制度がある。研究型の総合大学に職員のアドバイザーを置くケースも多く、修士レベル

の専門職として位置付けられているという。

専門的な力を高めようと、森川氏はカンザス州立大学のアドバイジングの通信制修士課程でキャリア発達、カウンセリングなどを学んでいる。大枝氏はキャリアカウンセラーの資格を持ち、各種研修などで研さんを続けている。アドバイジングの国際学会には毎回、どちらかが出席。国内の高等教育関連の学会等では、アドバイザー制度について積極的に情報発信している。

森川氏はホテルのコンシェルジュ、大枝氏は転職支援会社のカウンセラーの仕事を経て母校の職に就いた。どちらも前職で相手の真のニーズを引き出す対話の技術を修得したこと、転職の経験を経てより広い視野でキャリア形成について考えられるようになったことが、今の仕事に役立っているという。

学内の人事制度上、アカデミックアドバイザーは専門職には位置付けられず、定期異動の対象になり得る。小瀬センター長は上司、教員の視点から「2人は、専門職の学位を持つアメリカのアドバイザーと同等の仕事をしている」と評価。教育理念の実現に直接的に関与する専門性を学内でどう評価し、制度の中に位置付けるか、今後の課題と言えそうだ。

* 幅広い分野を学びながら自分の専門分野をじっくり見極めること。